

外科の夜明け



公立昭和病院 産婦人科部長

東京大学医学部産科婦人科学教室非常勤講師

武知 公博 (高校 28 期) 1976 年 卒業

富山医科薬科大学 (現 富山大学) 医学部卒業

昨年の 11 月に開催された SSH 企画立川高等学校生物学シンポジウムで「コウノドリの世界 - 新しい命が生まれる現場から - 」というテーマで講演をする機会をいただきました。妊娠初期からの超音波画像を中心に出産までの経過を概説し、後半には胎児発育不全のため予定日の 6 週間前に緊急帝王切開に至った妊婦さんの手術動画を供覧しました。1581 g の未熟児が元気な産声を上げる、それを聞いたお母さんの目に光るものが見える (通常の帝王切開は意識下で行われます)、正しく私たち産婦人科医が「参加 (産科) することに意義がある」と自らの仕事をオリンピックに重ねる一瞬です。

講演の冒頭に TV ドラマ「コウノドリ」を紹介しました。「コウノドリ」は 2015 年 10 月 - 12 月、2017 年 10 月 - 12 月に放映された産科診療を描いた医療ドラマです。原作は現在もコミック雑誌モーニングに連載されています。ご覧になった皆さんも多いのではないのでしょうか。このドラマは実在の産婦人科医をモデルにしており、私たち産婦人科医の日常臨床が実にリアルに描かれています。



昨今の産婦人科医不足に危機感を抱いた日本産科婦人科学会が全面的にバックアップしたとも聞いています。TV ドラマの影響で産婦人科医を志望する若者がどのくらいいるのか、その効果のほどは定かではありません。涙目で「倍返しだー！」といつも叫んでいる姿を見て、銀行員を志望する人がいるとはあまり思えませんが、「海猿」を見て海上保安官に憧れる人はいそうです。私の周囲にも手塚治虫の「ブラックジャック」に憧れて医師になったと言っている人は少なくありません。職業選択において TV ドラマの影響も無視できないのかもしれないかもしれません。もし産科医療に興味を持たれたなら、是非とも「コウノドリ」の DVD をご覧ください。私たち産婦人科医の日常が等身大に描かれています。

私の場合は一冊の本がきっかけでした。本棚の片隅に古びた文庫本が置いてあります。購入した書店の紙カバーがかけてあり、日焼けした背表紙には手書きで“DAS JAHR—HUNDERT DER CHIRURGEN JÜRGEN THORWALD”と書いてあります。巻末には、昭和46年12月15日第1刷発行、昭和50年2月4日第4刷発行とあり、もちろん翻訳本（塩月正雄訳）です。当時高校生だった私が背伸びして、邦題の「外科の夜明け」ではなく、ドイツ語への憧れもあり、あえて原題を書き込んだものです。今となっては気恥ずかしい思いがします。

小中学生の頃から、何となく医師になりたいと思っていました。ただ自分の血縁・知人に医師は全くおらず、医師の具体的なイメージもなかったため、漠然とした思いに過ぎませんでした。高校生の時に何気なく書店で手にしたこの本に感銘を受け、何としても、医学の世界の末席を汚してみたい、と医学部への進学を固く決心したのでした。

この本の主題は、麻酔と感染です。産婦人科関連では、帝王切開と産褥熱の章があり、最も印象深かったのは、ゼンメルワイスの産褥熱に関わる物語である「汚れた手—医師たちはあまりにも無知だった—」の章でした。そのさわりをご紹介します。産褥熱とは、出産の際に生じる傷に細菌が感染することによって起こる熱性疾患で、かつては妊産婦死亡の主要な原因の一つでした。ゼンメルワイス（1818—1865）は、病原菌の概念がなかった当時、産褥熱は接触感染による疾患であり、医療従事者に手指の消毒を徹底させることにより制圧できることを明らかにしたハンガリー人産科医師です。ゼンメルワイスが勤務したウィーン総合病院産科は第一産科と第二産科に分かれていて、産褥熱による死亡率は1846年当時、第二産科では1%以下でしたが、第一産科では10%以上に達していました。第二産科は助産師・助産師学生が分娩を介助し、医師の関与はありませんでしたが、第一産科は医師・医学生が担当し、病理解剖後に手洗いをせずに産婦の診療をしていたのでした。医師たちは産褥熱の本態を解明しようと熱意をもって病理解剖を行い、その後熱心に産婦を診察した結果、ますます産褥熱を蔓延させるに至ったという皮肉な状況でした。産婦は機械的に、月・水・金は第一に、火・木・土は第二に、というように振り分けられていました。第一の死亡率の高さは産婦たちにも知れ渡っていて、陣痛のさなか第一に運び込まれる産婦は半狂乱になって第二が開くまで入院を一日延ばしてほしいと懇願したといえます。その後の詳細な研究によりゼンメルワイスは、産褥熱が接触感染によることを突き止め、産科病室入室前の塩素水による手洗いにより死亡率を激減させました。しかし、医師自身が産褥熱の原因であり多数の女性を死に至らしめた、という無名のゼンメルワイスの主張は学会に受け入れられず、奇怪な学説として無視あるいは排斥されました。病理解剖学の権威ウィルヒョウもゼンメルワイスの説を徹底的に批判したことが知られています。権威の発言が必ずしも正しいとは限らないことは、現在にも通じるものがあると思われれます。その後、彼は精神に異常をきたし精神病院で不遇の死を遂げました。この章では、ゼンメルワイスは最後に介助し

た分娩の際に誤って自らの指を切り、その傷から病原菌が侵入し敗血症によって亡くなった、と結ばれています。

奇しくも昨年はゼンメルワイスの生誕 200 周年で、広尾にある日赤医療センターでは顕彰胸像設置式典が行われ、上皇后さまのご臨席を賜りました。

その後、同じ著者の続編ともいえる「近代外科を開拓した人びと」を貪るように読みました。医学部に進学してからは卒業間際まで外科医になろうと思っていました。ところがどういふ風の吹き回しか、今となってはその心境の変化はよく覚えていませんが、産婦人科医になってしまいました。ひょっとしたら、この産褥熱の強烈な印象が無意識の中であって、産婦人科学に誘われたのかもしれませんが。その意味で、この色褪せた文庫本は自分の医師人生の原点かもしれません。

原題を直訳すると「外科医の世紀」ですが、私はこの「外科の夜明け」という邦題がとても気に入っています。この駄文を物するにあたって、ほぼ 40 年ぶりに読み返してみました。幾許かの臨床経験を経た今、また新たな視点から読了することができました。次に読み返すのは、産婦人科医を引退するときかもしれません。そして来世でも読み返してみたいので、その際には枕元に添えるよう、今から家人に頼んでおくことにしようと思っています。

今回、あらためて「外科の夜明け」（講談社文庫）について検索してみました。この本は既に絶版になっていますが、2007 年にへるす出版から「近代外科のあけぼの - 外科医の世紀 - 」として医師による新訳が出版されたそうです。へるす出版はその名称が示すように医療関連専門出版社です。この著作がいかにも多くの医療者から支持されていたかの証だと思われれます。検索してみると、実に多くの医師たちが、「かつてこの本を読んで医学部に進学した」「医学部生の時に読んで外科医になった」「外科医になってからも自らのよりどころにした」等々の感想を述べており、名著の影響を再認識した次第です。この著作の影響を受けたのは自分だけではなかったことを知り、何とも形容しがたい気持ちになりました。医療の道を志す皆さんはもちろんのこと、自然科学を学ぼうとする皆さんにも是非一読をお勧めしたいと思います。